



## ディドロ『聾啞者書簡』翻訳（1）

川野, 恵子

---

**(Citation)**

美学芸術学論集, 17:63-83

**(Issue Date)**

2022-03

**(Resource Type)**

departmental bulletin paper

**(Version)**

Version of Record

**(JaLCD0I)**

<https://doi.org/10.24546/81013312>

**(URL)**

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/81013312>



デイドロ『聾啞者書簡』翻訳（1）

川野恵子

Keiko KAWANO

本稿はデイドロ初期著作の一つである『聾啞者書簡』（一七五一年）冒頭部分の拙訳である。今後三、四回に分けて連載し、最後まで翻訳する予定である。『聾啞者書簡』で展開されるのは「倒置論」であり、これは当時流行していた哲学主題である。神授される普遍的理性を前提とする合理主義言語論は、人間の思考の「自然な順序（ordre naturel）」も普遍的なものと捉え、しばしば他の言語の語順には思考の自然な順序に反する「倒置」が見られるが、フランス語はそれに一致していると説いた。ここから、フランス語は最も明晰な言語であるという言説が形成され、広く伝播し、神戸大学共通教育フランス語シラバスの定型リード文にも使われる「明晰でないものはフランス語ではない」というリヴァロールの『フランス語の普遍性について』（一七八四年）に出てくる有名な一節も、この流れに含まれる。ただしこの時代は同時に、合理論を覆そうとする経験論哲学興隆の時代であり、理性の経験的獲得が論証されるに連動して、人間思考における「自然な順序」の普遍性も様々な形で問い直された。こうした動向の中で、もし人間の思考の順序が普遍的でないとしたら、フランス語に倒置があることになるのか、さらにはフランス語以外の言語、とり

わけ古代の言語の語順は倒置が多いとされているが、それは倒置といえるのか等を問う「倒置論」の流行が生み出された。

無論デイドロも経験論ないし感覚論の立場から倒置論再考に取り組み、この『聾啞者書簡』を著した。今回訳出した箇所ではまず、人間の思考順序が言語使用の習熟とともに歴史的に変化してきたこと、したがってその順序は「自然な／生来の順序 (l'ordre naturel)」と「すっかり形成された言語を操る精神」に現れる「制度上の順序 (l'ordre d'institution) / 学問的順序 (l'ordre scientifique)」の二つに区別される必要があることが述べられる。この区別をつけると、一つの文章の品詞の並びが、ある人の思考順序にとって自然でも、ある人にとっては倒置であるということが起こりうる。この思考順序の歴史性を証拠づけるため、デイドロは、まだ「すっかり形成された言語」を持つに至っていない段階の人間の思考順序を探る実験を思いつく。それは、言語の進化形に位置付けられる「分節音言語」の使用を禁じられた「取り決めによる啞者」に、人間起源の言語である「身振り」で自分の考えを表現してもらうという実験である。ただしこの「取り決めによる啞者」は、本来は日常的に「すっかり形成された言語」を使用しているために、その身振り表現は「本来使い慣れている言語記号の順番」に影響を受けてしまうのではないかという懸念が示され、分節音言語を持たない「生まれつきの聾啞者」に助けを借りる必要性が浮上する。ここまでが今回の訳出箇所である。

先に述べた通りこの「倒置論」は当時の流行であり、デイドロ自身この著作の冒頭で、バトウー、コンデイヤック、デュマルセなどの先人たちの名前を挙げる。ただし、身振り論に多く割かれるデイドロの倒置論は、後の演劇作品におけるパントマイムの実践やその理論の展開へと結び付けられうる点において特異であり、同時に今回の訳出箇所

降に思考順序の「倒置」の問題だけでなく、詩的表現の「倒置」の問題が扱われ、それが絵画芸術論へと発展していく点において、芸術理論としても重要であると考え、訳出を試みた。翻訳にあたり、ギリシャ・ラテン語については戸高和弘先生、フランス語についてはアトランさやかさん、Manon Ghislan さんの貴重な助言を得た。記して心より御礼申し上げます。

## 凡例

1. 底本として一九七八年に出版された以下のエルマン版のデイドロ全集を用いる。本文は全て翻訳した。註に関しては「DPV 註番号」と略号を用いてほとんど訳したが、細かい参照書誌情報などは紙幅の関係で省略した場合もある。

Denis Diderot, *Lettre sur les sourds et muets, à l'usage de ceux qui entendent et qui parlent*, *Œuvres complètes, idées II*, 1751, t. 4, éd. Yvon Belaval [et al.], Paris, Hermann, 1978.

2. 上記と合わせて、次の校訂版も参照した。必要と思われた場合は略号を用いて、註を部分的に翻訳した。

[GAL] Denis Diderot, *Œuvres philosophiques*, éd. Michel Delon ; avec la collaboration de Barbara de Negroni, Paris, Gallimard, 2010.

[FLA] Denis Diderot, *Lettre sur les aveugles : à l'usage de ceux qui voient ; Lettres sur les sourds et muets : à l'usage de ceux*

*qui entendent et qui parlent*, présentation, notes, dossier, chronologie, bibliographie par Marian Hobson et Simon Harvey, Paris, Flammarion, 2000.

[ *EDS* ] Denis Diderot, *Premières œuvres 2*, textes établis et présentés par Norman Rudich et Jean Varloot, Paris, Éditions sociales, 1972.

[ *LAF* ] Denis Diderot, *Œuvres. Tome IV, Esthétique-théâtre*, éd. Laurent Versini [et al.], Paris, R. Laffont, 1996.

[ *CFR* ] Denis Diderot, *Œuvres complètes. 2. Le Philosophe et son double*, Roger Lewinter [et al.], Paris, le Club français du livre, 1969.

## 聾啞者書簡

——聞けて話せる人々に宛てて 補遺付

……道筋の向きを逆につけながら略奪し。  
前にまっすぐ向いた足跡を残さないようにと……<sup>120</sup>

著者〔デイドロ〕より

書籍商B氏に宛てた手紙

V…より<sup>3</sup> 一七五一年一月二〇日

あなた様〔『聾啞者書簡』書籍商B氏〕<sup>4</sup>に『同一の原理に還元された諸芸術』の著者〔Ch. バトウー〕に宛てた書簡をお送りする<sup>5</sup>。友人たちからの助言を受けて、見直し、修正し、加筆したものの、タイトルだけは変えなかつた。このタイトルが、たくさんの「聞くことなく話す」人々も、少数の「話すことなく聞く」人々も、ごく少数の「話せて聞ける」人々も一様に対象としうることは認める。とはいえ、この書簡が宛てられているのは、ほとんどごく少数の「話せて聞ける」人々でしかない。

このタイトルは他の著作を真似たもので、それほどよくないことも認めるが、これ以上のものを探す気力がない★。  
〈★盲人書簡——見える人々に宛てて 補講付〉そういうわけで、あなたにとつてタイトルの選択がどれほど重要に

思われたとしても、わたしは変えるつもりはない。

引用をあまり好まない。ギリシャ語の引用ならなおさらだ。ギリシャ語の引用は、著作物に学問的な調子を与えてくれるが、今日もはや廃れてしまった。大半の読者はギリシャ語の引用にたじろぐから、もしわたしが書籍商なら、読者が嫌がるような箇所は削除するであろう。しかし、わたしは書籍商ではないのだから、いたるところでギリシャ語を引用したが、そのままにしておいた。「書籍商の」あなたは、出版する本が読まれさえすれば、その本が良い本かどうかということはほとんど気にならないとしても、わたしは、あまり読まれない危険を冒してでも自分の著作を立派に仕上げたい。

気の向くまま転々とたくさんの事柄について取り上げる。これについてあなたに「改めるよう」助言する人々には、それは少しも欠陥ではないと知らしめればよい。手紙においては自由に語らうものだし、一文の中で最後に一言断つておけば、次の話題に移って差し支えない。

そういうわけで今言った問題だけがあなたの気がかりであるなら、もうこの手紙は印刷にまわすことができる。ただ著者名は伏せてもらいたい。なんにせよ、わたしの名を知らしめる時間は今後たつぷりある。現時点でも、読者がこの書簡を読んで、誰の書いたものとしなにかについては検討がつく。おまけに、この書簡を読者が読み、その中に思想の斬新さ、ある種の想像力、文体、なんだかわからない思想上の放肆さ（これはわたしのものとされれば非常に遺憾だが）、数学と形而上学のひげらかしや、イタリア語と英語、それよりは控えめにラテン語とギリシャ語を駆使し、音楽については存分に論じるといったようなことが認められるなら、読者は誰の書簡とするだろうかということについては、もつとよくわかっている<sup>7</sup>。

どうか、用例のなかに誤植が混入しないように注意してほしい。一つで全てが台無しになってしまう。アーウエルカンフによる素晴らしい校訂を経たルクレティウスの最終巻の図版のなかにお気に入りの人物がいる<sup>8</sup>。ただこの人物を半分隠してしまっている子供を遠ざけ、胸の下のほうに傷があると想定し、それを刺し傷と思いつまわせることだけは必要だ。S氏<sup>9</sup>、彼はわたしの友人だが、彼に校閲を頼んである。彼はヌーヴ通りに住んでいる。草々

## 聾啞者書簡

聞けて話せる人々に宛てて

この書簡において、倒置の起源、文体のハーモニー、場面の崇高、古今の大半の言語にフランス語が優れるいくつかの点を論じ、話の流れで美術に特有の表現についても論じる。

あなたの研究を横取りするつもりなど全くなかった。この書簡のなかであなたが同意される箇所は全て、もともとはご自分で考えたことだと主張していただけで構わない<sup>10</sup>。わたしの考えがあなたに近いということがあるなら、それはしばしばその葉をコナラの葉に混ぜるキツタのようなものである。この書簡をコンデイヤック氏やデユマルセ氏に宛てることもできただろう。彼らも倒置の問題を論じているのだから<sup>11</sup>。しかしわたしの頭にまずあなたが浮かんだ。あなたが相手であれば、読者も決して最良などとは思わずに、意義ある競演と考えると確信し、あなたに宛

てることにした。唯一恐れていることがあるとすれば、この書簡のせいでああなたの気が散り、哲学の研究に疑いなく充てられ、またそうしなければならぬ貴重な時間からあなたを奪うことである<sup>12</sup>。

倒置についてよく論じるためには、数々の言語がいかに形成されたのかを検証することが適切であると思う<sup>13</sup>。感性的な物質 (*les objets sensibles*) が最初に「われわれの」感覚をとらえた。感性的な質を複数持ち合わせるそれらの物質が最初に命名された。これらの様々な個体 (*des différents individus*) が、この世界を構成する<sup>14</sup>。続いて、「個体にまとめられる」感性的な諸質が互いに識別され、それらに名称 (*nom*) が与えられた。これらが大部分の形容詞である<sup>15</sup>。最後に、「個体にまとめられる」感性的な諸質が捨象され、それらの個体すべてに共通しているもの、例えば、相互不可貫入性、広さ、色、形等々が見つけられた、ないし見つけられたと信じられ、形而上一般名称 (*les noms métaphysiques et généraux*) とほとんどすべての名詞 (*substantifs*) が形成された<sup>16</sup>。人々は少しずつこれらの名称が現実の諸存在を代理する (*représenter*) と信じるのに慣れ、感性的な諸質を単なる偶然とみなすようになった。言い換えれば、本当は名詞は何ものでもなく、「形容詞がすべてである」にもかかわらず、形容詞が現実に名詞に從属すると思込まれた<sup>17</sup>。もしあなたが物体 (*corps*) とは何かと問われれば、あなたは、「もの・広がりがあり、相互不可貫入で、形があり、色があり、動く (*une substance étendue, impenétrable, figurée, colorée et mobile*)」と答えるだろう<sup>18</sup>。しかし、この定義からあらゆる形容詞を差し引いてみなさい。あなたが「もの」と呼んだ虚の存在に何が残るだろう<sup>19</sup>? もし自然な順序 (*ordre naturel*) にしたがって品詞を並べ、定義しようとするなら、「色があり、形があり、広がりがあり、相互不可貫入で、動く・もの (*colorée, figurée, étendue, impenétrable, mobile, substance*)」と言えよう。人がある物体を最初に目にするとしたら、まさにこの順番で、その「物体を構成する」諸部分のさまざま

な質がその人に働きかけるだろうと思われる。目 (vis) がまず、形、色、広がりによってとらえられるだろう。次に触覚が物体に接近し、「物体が」相互不可貫入であることを発見するであろう。くわえて、視覚 (vis) と触覚が一緒になって「その物体が」動くことを確かめるだろう。したがって、この定義「色があり、形があり、広がりがあり、相互不可貫入で、動く・もの」には、「大抵の場合形容詞が名詞の後に置かれるフランス語文法から言えば、品詞の順序が倒置されているように思われるが」倒置など少しもないということになるだろう。むしろ、最初の「フランス語文法にしたがった語順による」定義「もの・広がりがあり、相互不可貫入で、形があり、色があり、動く」に倒置がある<sup>20</sup>。こうしたことから帰結するのは、フランス語において倒置は少しも存在しない、あるいは少なくともギリシャ・ラテン語よりも極端に稀だとする「よく言われる主張を」支持しようにも、たかだか以下の意味においてのみ可能である。一、フランス語の構文の大部分は一定 (uniforme) である<sup>21</sup>。二、フランス語の構文において、名詞は形容詞の前に常に、あるいはほとんど常に置かれ、動詞は名詞と形容詞の間に置かれる<sup>22</sup>。というのも、形容詞は名詞の前に置くべきか後ろに置くべきかという問いそれ自体を問題とするなら、われわれフランス人は観念の自然な順序をしばしばひっくりかえしているということがわかるだろう。今示した例が、その証拠である<sup>23</sup>。

わたしは諸観念の「自然な順序 (ordre naturel)」といった。というのも、ここでは「自然な順序」と「制度上の順序 (l'ordre d'institution)」を分けなくてはならないからだ。後者を言い換えれば、「学問的順序 (l'ordre scientifique)」となる。つまり、すっかり形成された言語を操る精神の視点の順序である<sup>24</sup>。

一般的な人にとっては、形容詞は感性的な諸質 (qualités sensibles) を代理し、諸観念の自然な順序の最初に位置する。しかし哲学者にとっては、というよりむしろ、抽象名詞を实在視することに慣れた多くの哲学者にとっては<sup>25</sup>、

名詞が学問的順序の最初に位置する。というのも、この哲学者たちの話し方からすると、名詞が形容詞のもとにあり、すなわち形容詞を支えているのだから。そういうわけで、先の物体に関する二つの定義のうち、最初の定義〔名詞から形容詞〕は学問的順序すなわち制度上の順序に従い、後者〔形容詞から名詞〕は自然な順序に従っている。

ここから、ひとつの結論を引き出すことができよう。その結論とは、あらゆる一般形而上存在を作り出したペリパトス派哲学のおかげで、古代語のなかで倒置と今日呼ばれているものが、われわれの言語にはもはやほとんどないということである<sup>26</sup>。実際、ガリア語には今日よりずっと多くの倒置があるが、ペリパトス派哲学者が支配し、われわれの言語はルイ十三世とルイ十四世のもとで完成した。古代人は自然を一般化するというよりは、詳細に、個別的に研究した。したがって、その言語の展開はあまり一定 (monotone) ではなく、「語順を比較的入れ替えることができ」、なのでおそらく倒置という単語は古代人にとつては非常に耳慣れないものであつただろう。「ところで」ペリパトス派の哲学はアリストテレスの哲学であり、結果的には古代人の哲学一派に属するといつて、わたしに反論するということはしないでいただきたい。というのも、あなたには弟子たちに今日のペリパトス主義<sup>27</sup>は、アリストテレスの哲学とは全く異なると教えていただきたいからである<sup>28</sup>。

では、どのように数々の〔諸観念の自然な順序から見た〕倒置表現が諸言語のなかに導入され、残つたのかということを説明するために、世界創造や言語起源に遡る必要はおそらくないだろう。わたしが思うに、頭の中で知らない言語を話す人々のなかに身を置いてみるだけで、十分事足りるだろう。あるいはほとんど同じことだが、分節音言語の使用をせず、身振りだけで自分の考えを表現するように、誰かに頼んでもいいかもしれない<sup>29</sup>。

〔身振りだけで自分の考えを表現するように頼んだ〕この人には容易に答えられる質問を投げかけたほうが、この

実験にはより適切だろう。そうしたほうが、その身振りの連続から、一、どのような観念の順番が、身振りによって思考 (pensées) を伝達しあう原始人たちにとつてもつともわかりやすく思われたのだろうか、二、どのような順序で、発話される言語記号 (signes oratoires) を発明することができたのだろうかという点について確かに推論することができる<sup>30</sup>。

くわえて、「取り決めによる哑者 (muet de convention)」が、その「複数の品詞からなる」答えを組み立てる時間を十分持てるように留意するだろう<sup>31</sup>。彼に投げかける質問には、どのように身振りで表現され、どのように展開するのかもつとも興味を抱くような観念を必ず組み入れるだろう。同じ観念について、いくつか〔身振りの表現を〕試してみたり、複数の人に対して同時に同じような質問を試してみたりすることは、有用ではないにしても、少なくとも面白いのではないだろうか。私の意見では、ある哲学者が仲間の何人かとこの方法で優れた精神や優れた論理力を求めて訓練したとしても、まったく時間の無駄ではないと思われる。アリストファネスに始まりどんな喜劇作家でも、疑いなくその様子から面白い舞台を作るかもしれないが、だとしても何が問題なのだ<sup>32</sup>？ ゼノンが弟子たちに言ったことを互いに言い合うかもしれない<sup>33</sup>。「もし君が哲学者でありたいなら、滑稽であることを覚悟しなさい。」なんと素晴らしい格言、これは、「われわれ哲学者がなしてきた」人間に関する議論やあらゆる瑣末な考察の上に、われわれ「哲学者」よりもあまり勤勉ではない魂を位置付けうるのだ！

ここで提案した訓練を通常のパントマイムと混同すべきでない。一つの筋 (action) を表現することと会話 (discours) を表現することは、「どちらも伝達表現であるが」それらは全く異なる<sup>34</sup>。「取り決めによる」哑者たちの伝達表現に倒置があることはほとんど自明である。それに、哑者たちは各々自分の文体／スタイル (style) を持っていて、その

倒置は彼らの表現の中で古代ギリシャやローマの著作の中で認められるような倒置と同じくらい際立った違いがあるということも予想がつく<sup>35</sup>。ところで、文体とは、常に書き手が一番良いと判断するものであるのだから、「話し言葉」を禁じると取り決めて、身振りで伝達するという「実験が終わった後に会話があるとすると、それは非常に哲学的で盛り上がるだろう。というのも、取り決めによる唾者たちはみな、話すことが許されれば、自分の表現の正しさを証明するのみならず、身振りの順序のなかでしかじかの観念をとりわけ強調したことに、その正当性を説明するように求められるだろうから。

このような考察は、もう一つ他の考察を導く。それは少し脱線ではあるが、手紙なのだから許されるだろうし、よい視点を導く可能性があるなら、なおさらだ。

その私のアイディアとは、言うならば一人の人間を分解して、その人が五感の一つ一つからどのようなことを把握するのかそれぞれ考察するというものだ<sup>36</sup>。ときおりこの種の形而上の解剖学<sup>37</sup>に夢中になっていたことを思い出す。それによつて、あらゆる感覚の中で、視覚が最も表層的、聴覚が最も傲慢で、嗅覚が最も享乐的、味覚が最も偏狭で変わりやすく、触覚が最も深く、哲学的であるということをみつけた<sup>38</sup>。これはわたしの空想だが、五感のうちのおのおの一つしか与えられていない五人からなる共同体があったら、それは滑稽だろう。なぜなら、彼らは皆疑いなくお互いに無感覚呼びわりするだろう。もつとも、どう考えていただけでもご自由ですが<sup>39</sup>。だけれども、この様子はまさに、この世界に常に起こっていることを反映している。なぜなら「この世界では」、一つの感覚ですべてを判断する。くわえて、おのおの五感のうち一つしか使えない五人からなる社会については、次のような一風変わったことが考察されねばならない。つまり、その五人がもし抽象するという能力をもつとすると、この抽象能力

によつて、彼らは全員幾何学者になりえ、お互いに見事に意思を伝達し合うことができ、しかもその意思疎通はただ幾何学に基づきうるのかどうか考察しなくてはならない<sup>40</sup>。とはいえ、取り決めによる唾者たちの話題に戻り、彼らに返答を求めるとすれば、その質問はどのようなものになるのか、考察を再開したい。

もし複数の返答が可能な質問が唾者たちに投げかけられると、ほとんど必然的に、ある唾者が一つ返答し、もう一人の唾者がもう一つ他の返答をして、それらの表現を比較することは、不可能でないにしても少なくとも困難であるという事態に陥るだろう。これは不便なので、わたしは次のようなことを思いついた。一つ質問をするより、おそらくあるフランス語の文章を身振りに翻訳してもらう方がいい<sup>41</sup>。「身振りによる」この翻訳者には省略を必ず禁じなければならぬだろう。省略を用いて簡潔さをさらに高めなくても、身振り言語はそもそもあまり明白ではない<sup>42</sup>。生まれつきの聾唾者たちがお互いに意思疎通するために尽くす努力は知られているし、彼らが表現しうることはすべて表現するということは知られている。そこで、わたしは目下の取り決めの唾者たちに、生まれつきの聾唾者たちに倣い、主語と述語がどのような関係であつても述べられないようなフレーズはできるだけ形成しないように求めるだろう。一言でいえば、取り決めの唾者たちが自由にしているのは、諸観念に与えるのに相応しいと判断した順序だけで、より正確にいえば、それら諸観念を示すために用いる身振りに相応しいと判断した順序だけであろう。

しかしここでわたしは些細な疑念を覚える。それは、われわれの精神に示される数々の思考は、どういうメカニズムか知らないが、大抵の場合、それらが話される時 (discours) の形をしている、いわば「すでに」きちんと服を着た状態にあるということである<sup>43</sup>。こうした奇妙な現象が、取り決めによる唾者たちの身振りに影響を与えてしまふのではないか、外国語で著述するほとんどすべての者に訪れる誘惑、すなわち、取り決めによる唾者たちが本来使

い慣れている言語記号<sup>44</sup>の順番にしたがって(身振り)記号の順序を決めてしまふ誘惑に屈してしまふのではないか、今日の最も素晴らしいラテン語学者でも、われわれと変わらずフランス語の言い回しをしてしまふのと同様に、取り決めの唾者たちの(身振りの)構文が、いかなる言語概念も一度ももつたことがない人間の構文とは違うのではないかと懸念される必要があるだろう<sup>45</sup>。これについてどのようにお考えになるだろうか?もし取り決めの唾者たちが雄弁家というより哲学者であれば、こうした不都合はわたしが考えるほどには起こらないだろう。しかしいわずれにしても、生まれつきの聾唾者に助けを求めてもいいかもしれない。

## 註

- 1 「訳註」ディドロは省略して『アエネイス』を引用しているが、以下が既訳の該当箇所全文である。「前にまっすぐ向いた足跡を残さぬようにと、牛のノ尾をつかんで洞穴内に引きずり込む。道筋の向きをノ逆につけながら略奪し、暗い岩穴に隠そうとした。(ウエルギリウス『アエネーイス』岡道男・高橋宏幸訳、京都大学学術出版会、二〇〇一年、三六〇頁)」。本稿では戸高和弘先生にフランス語からの翻訳をお願いした。また、倒置という『聾唾者書簡』の主題と『後ろ向きに引かれる雌牛』というこの断片の重なりについて、さらにこの一節が『ホメロスの諸神讃歌』の一つ『ヘルメス讃歌』の七五行以下(同様に逆向きの牛の足跡の記述がある)を範としていふことについて貴重なご教示をいただいた。
- 2 「DPV 1」ディドロは節の順序を倒置して『アエネイス』を引用する(Enéide, VIII, v. 209-211)。この箇所では描かれるのは巨人のカクスで、彼はヘラクレスの雌牛を盗み、それを隠蔽するために雌牛たちを後ろ向きに洞窟に入れる。この(後ろ向きの雌牛たちという)描写がさらに一種の逆転/倒置(inversion)を作り出している。
- 3 「GAL 1」>とはヴァンセンヌ(Vincennes)のイニシャルのことである。ディドロはおそらく『盲人書簡』(一七四九年)出版後の投獄を皮肉を交えて仄めかしている。

[DPV2] デイドロは本当はこの時期パリにいた。

4 [DPV3] 『聾啞者書簡』の書籍商ポント＝フィス (Le libraire Bauche fils)。

5 [DPV4] シャルル・パトゥー神父 (abbé Charles Bataux, 1713-1780)。弁論師の教師。リジュー、ナバラのコレージュで教えた後に、一七五〇年十月にギリシャ・ローマ哲学部[のコレージュ・ド・フランクス ([GAL3] (当時はコレージュ・ロワイヤル)) 教授に任命された。

6 [GAL4] 『聾啞者書簡』は実際一七五一年に著者名なしで出版された。一七五一年四月と七月に、『聾啞者書簡』を論じる二つの論文が、『レヴュー誌 (Journal de Trévoux)』に掲載されたが、(著者については)ただ「匿名の著者」とあり、「まったくわからない」と記されている。

7 [DPV5] 『懐疑論者の散步』冒頭のアリストのように、ここで記される人物像は、明示されていないがデイドロのことである。いくつかの特徴はデイドロに固有のものとしてあてはまり(とりわけ「思想上の放埒さ (hardiesse)」)その他の特徴も、もし人々がデイドロのものだとしても不快ではないであろう能力(イタリヤ語やフランス語の音楽)に一致している。

8 [DPV6] この「人物」は瀕死の女性で (DPV, p.186) そのモデルはオランダの文献学者シグバール・アーヴェルコン (Sjebert Havercomp, 1683-1742) にちなみ、巻本で出版された『事物の本性について』(ルクレティウス)にある。版画の作者はオランダの画家フランス・ヴァン・メリス (Frans Van Meiris, 1689-1763) である。

確かに五巻の最初のページに「ルクレティウスの最終巻の図版」はある。この図版は、人間性を打ちのめす自然災害を次々とたたみかける詩法を图示する。なぜ「デイドロは瀕死の女性であるこの「人物」を気に入ったのか? 絵画と詩の関係に関するデイドロの理論を証拠づけてくれたからである。

9 [DPV7] ガブリエル・ド・サルティヌ (Gabriel de Saligny) のこと。

10 [DPV8] デイドロはパトゥーの著作を参照したことを素直に認めている。最も参照されたのは、「ラテン語の文と比較したフランス語の文に関する書簡」アカデミー・フランセーズのトリヴェ神父に宛てて (Lettres sur la phrase française comparée avec la phrase latin, à M. l'abbé d'Olivet, de l'Académie française) が収録される『文学講義 (Cours des belles-lettres)』(一七四七-一七四八年)の第三巻である。本書では次の初版を参照した (Paris, Desaint et Saillant, 1747-1748, 4 part. en 2vol.,

In-12.)。

「訳註」バトラーの『文学講義』についてはローザンヌ大学所蔵のものが Google Books で簡便に閲覧することができる。Google Books 上の巻号は任意のものではないが最も参照したとされる第二巻は Google Books 上の二巻の途中からはじまり、三巻にかけて下リヴェ神父に宛てた十の書簡が収載される。その題名をいくつか記す。「第一書簡:倒置があるのはラテン語かフランス語か」、「第二書簡:倒置がフランス語にあることについて、またなぜフランス語にあるかについて」、「第三書簡:ラテン語とフランス語の比較から導き出された翻訳の諸規則」。

- 11 [DPV 9] 「倒置の問題」については、実際にコンディヤックは『人間認識起源論』(以後『認識論』と省略)(一七四六年)「倒置について」(2-1-12, § 117-126)において論じている。デュマルセの倒置論は『ラテン語習得のための体系的的方法論』の影響ですすこと前から知られていた(Exposition d'une méthode raisonnée pour apprendre la langue latine, Paris, 1722, p.9-50)。デュマルセはこの倒置論をのべて『百科全書』第三巻の項目「構文(Construction)」と『文法論理学』諸原語(Logique et principes de grammaire, éd. de 1792, t. 1, p.220-226)においてより深めた。

12 [DPV 10] バトラーが最近任命されたことの暗示と思われるが、正確にはもはやわからなず、デュマルセはこれについてこの書簡の中で何度か触れる。

13 [DPV 11] コンディヤックが『認識論』の第二部「言語起源」から「言語の進化」にかけて用いた方法と同じである。コンディヤックは単語の起源と意味について検訛(2-1-9, 10, 11, § 80-116)その後「自然な語順(ordre naturel)」について論じる。自然な語順を倒置するのは個別的な事例である(2-1-12)。ヤコブ「文字(acriture)やユエロントロントロ論じられぬ」(2-1-13)。

14 [DPV 12] コンディヤック『認識論』(1-2-1, §1) および(2-1-9, §82)を見よ。

15 [DPV 13] コンディヤック『認識論』(2-1-9, §82)を見よ。

16 [DPV 14] 形而上名称を現実存在かのように用いる傾向のある実在論(réalisme philosophique)はかなり前から批判されてきて、とりわけロマンに顕著である(『人間哲学論』(3-1, §5 および 3-3, §9))。形容詞から形而上の名詞への移行(ロマンは「コンディヤック『認識論』の以下の箇所を詳細に論じられぬ」(2-1-9, §93)。『人間哲学論』(3-1, §5 および 3-3, §9))。形容詞から形而上の名詞への移行(ロマンは「コンディヤック『認識論』の以下の箇所を詳細に論じられぬ」(2-1-9, §93))。『人間哲学論』(3-1, §5 および 3-3, §9))。

- マルセも似たような論を『百科全書』第一巻の項目「抽象」で展開するが、コンディヤックほど周到ではない。
- 17 [DPV 15] 「コンディヤックと同じような論の展開 (2-1-10, § 103-104)。
- 18 「訳註」言語起源において、形容詞は名詞より先に形成されるにもかかわらず、人は名詞の使用に慣れると、形容詞が名詞に従属すると考えるようになるという論を証拠づけるために、大半の形容詞が名詞の後ろに置かれる近代フランス語の語順が示されている。ただし日本語では今日でも、デイドロの考える言語起源の語順と同じく形容詞は通常名詞の前に置かれるため邦訳が難しいが、「」を用いて出来るだけ原文に沿うように努めた。
- 19 [DPV 16] 諸賢によって支えられるものとして名詞を定義したのはロックである (2-23, § 2)。
- [GAL 6] 『認識論』 (2-11, §113)、『人間悟性論』 (3-10, §9)。パトゥーは反対に、われわれはもの (substances) の概念を理解することから始まり、ものこそが最も単純に着想されるはならず、そこにだんだん述語 (predicat) が加えられると考えた (「第二の手紙」『文学講義』第二巻)。
- 20 [DPV 17] デイドロは形容詞について第二の系統を提示したいように見える。事実、デイドロの記述によれば、形容詞は、「感性的な物質」を指し示す名称 (nom) との関係においては二番目に形成され、「形而上の名称」との関係においては一番目に形成される。このデイドロの理論が、彼の先達たちよりもはるか先をいくような形容詞論の洗練を意図していることは明らかである。デイドロ以前に、「形容詞がすべて」と大胆に主張したものは誰もいない。
- 21 「訳註」ギリシヤ語やラテン語はフランス語よりも多くの格変化が可能で、語順を比較的自由に動かすことができるために倒置が多いようにみえる一方で、フランス語の語順は基本的に一定なために倒置が少ないようにみえる。
- 22 [DPV 18] これは、ポール・ロワイヤルの『般文法』に学んだあらゆる文法学者が主張する学説である。たとえば、ラミ神父 (Bernard Lamy) は一六七六年の『弁論術すなわち話す技術』において以下のように論じる。「自然な順序はしたがって、あらゆる節の中で、主語を示す名詞 (nom) が最初に置かれることを求める。もし形容詞に伴われる場合は、名詞のすぐ後に形容詞が置かれることを求める (…)」。
- 23 [DPV 19] 『認識論』 (2-1-12, §117) を見よ。

- 24 [DPV 20] 「自然な (naturel)」もの「制度 (institution)」に由来するものを区別するべく、すでにコンディヤックの『認識論』の主要な論点である (1-2-9, §35)。またロムティヤックのCh.ウォルフ『心理的心理学』(Ch. Wolf, *Psychologia rationalis*, §461) とデュボス『詩画論』第一部第一章 (Du Bos, *Reflexions critiques sur la poésie et sur la peinture*, Paris, 1719, p.515) への参照も見よ (1-4-2, §27)。
- [FLA 13] 諸観念が形成される生成の順序である「自然な」順序と社会生活や言語表現の習慣にしたがって展開される諸観念の順序とをデイドロは分けている。後者は直感的、理論的社会的実践、つまり学問 (science) に結び付けられている。
- 25 [GAL 9] 「人間悟性論」を見よ (3-6, §49)。
- 26 [訳註] 一般形而上存在に名詞が与えられ、その名詞の使用に慣れた精神を持つ人にとっては、名詞が形容詞を支えているように思われるために、名詞が先に来る語順が自然な観念の順序となり、「一般形而上存在を名詞で代理することに慣れていない人の言語の順序が倒置のように思われる。」
- [DPV 21] 思考の進化における哲学者の責任についてはコンディヤック『認識論』(1-5, §5) を見よ。
- 27 [LAF] つまり、トマス・アクィナスのスコラ学。
- 28 [DPV 22] デイドロがここで示した新旧ペリパトス派の区別は以下の論文が論証している。「したがって一般文法は、ギリシヤ哲学と異なりもはるかにスコラ哲学の影響を受けている。ギリシヤ哲学はスコラ哲学の体系と矛盾しない範囲でしか影響力を持ちえなかった (Gunvor Sahlin, *César Chesneau Du Marsais et son rôle dans l'évolution de la grammaire générale*, 1928, p.12)。」
- [訳註] コンディヤックも『認識論』のなかでペリパトス派が十二世紀に分化したことを指摘する (1-5, § 5)。
- 29 [FLA 15] 健聴者だが、身振りだけで表現する人をデイドロはまず例示する。しかしながら、難聴と啞はこの時代完全に一緒にされていた。
- 30 [DPV 23] 本人が否定しようとなかろうとデイドロは人間「本性 (nature)」の生来の同一性を前提とせずにはいられない。だからこそデイドロは、「発明 (invention)」の系統的順序と「表現 (expression)」の自然な順序を混同してもほとんど都合がないと考えている。まただからこそデイドロは、言語起源の問題から身振りに

る言語活動への問題へとぎわめて安易に飛躍する。言語起源においても、身振りによる言語活動においても、同じ「本性」が異なった方法で示される。

聾啞者の身振りの観察については、コンディヤック『認識論』をみよ(142, §15)。ただし結論はディドロと異なる。

31 「訳註」ディドロはこの実験で、身振りによるコミュニケーションに固有な品詞の順序を明らかにしたい。したがって「取り決めによる聾者」には主語と述語を中心に複数の品詞から成る回答を組み立てる時間が十分に与えられなくてはならない。

32 [DPV 24] おそらく『書』(アリストファネス)の暗示。この作品において、ソクラテス自身もまた「滑稽になり」、このことが「だとしても何が問題なのだ」という反論を根拠づける。

33 [DPV 25] 『ラヴォー論集 (Mémoires de Trévoux)』(avril 1751, p.853) の指摘のとおり、紀元前四世紀のストア派の祖キプロスのゼノンに就いて、四世紀後の一部の哲学者の最も有名な代表者の言葉を帰属させている。(147) これはエジュリヤス(50ca.-130ca.) が哲学者に向けた意見書(Manuel, ch. XXII, dans Epictète *Dissertationes*, éd. H. Schenkl, Leipzig, Teubner, 1916, p.16)。

34 [DPV 26] 上の区別はデフロント・ヤッコにちよって指摘されている(214, §34)。

35 [FLA 17] バトラーはクリソステ神父への「第二の書簡」において、身振りの文体 (style) の個性について詳述している。

36 [DPV 27] これはまたまたコンディヤックが『感覚論 (Traité des sensations)』(1754年)において展開したフィクションである。コンディヤックはこのフィクションを展開したのは自分一人だけではないと進んで認めるが(1754年12月1日の『感覚論』で遂行した計画に関して寄せられた批判にたいする回答)、『文芸通信』(Réponses à un reproche qui m'a été fait sur le projet exécuté dans le Traité des sensations. Voir Grimm, dans la C.L. du 1<sup>er</sup> décembre 1754)で、じかにディドロが第一人者であることははっきりと否定している。『盲人書簡』のなかに実際に実際に同じような系統のマイニエが認められるが(DPV, IV, p.47)「コンディヤックの『認識論』(1754年)の二箇所(1-21, §3, 1-6, §12)にせよに暗示されていることを決定することはできないのである。

37 [GAL 14] 「形而上の解剖学」はデフロントが『人間の博物誌 (Histoire naturelle de l'homme)』(Histoire naturelle, générale et particulière, avec la description du

Cabinet du roi. Paris, Imprimerie royale, 36 vol., 1749-1788, t. III, 1749, « Des sens en général », p.364.)で創始した方法から着想された。「コンディヤックも『感覚論』(一七五四年)を執筆する際に影響を受け、五感をだんだんと目覚めさせる彫像を描いた。

38 [DPV 28]『盲人書簡』と比較せよ (DPV, IV, p.31)。同様の考えは『おしゃべりな宝石たち』にも認められる (DPV, IV, p.119-125)。

39 [DPV 29]『盲人書簡』をなよ (DPV, IV, p.28)。

40 [DPV 30]「下口は普通言語(communication universelle)の問題を提起した最初の人物ではない。ライプニッツは『ウエルズ人への手紙』(一六七七年)のなかで、「普遍性や様々な国同士のコミュニケーションを少なくとも可能にする合理的言語ないし合理的文字に関する長年の計画について」論じている (Leibnizens gesammelte Werke, dritte Folge, Mathematik, erster Band, Berlin, 1849)。「下口が」[「コミュニケーション」の手段として数字に寄せる信類は疑いなく、「触覚算術 (arithmétique palpable)』の発明者盲人ソンドンソンへの熱狂に由来する。

[FLA 19]「モリヌークス問題に対するライプニッツの回答によれば、空間表象は様々な感覚に共通である(また『聾啞者書簡』に続く「下・ニ・ソ」嬢への手紙」も見よ)。ここから類推して、言語活動における絶対的な順序を認めるべきなのだろうか？

41 [FLA 20]「この翻訳の問題が提起される。幾何学の秩序 (ordre)」、これは個々の諸感覚によって把握可能であるが、諸感覚のコードとは無関係であるとすれば、その秩序は完全に普遍的なものとなるだろう。しかしながら、『盲人書簡』では、視覚による知識から触覚による知識への置き換えは完全ではないことが示され、いずれにしても精神的な反応に関わる場合は完全ではない。ここから類推すると、異なる言語間での完全な翻訳は同じく不可能であろう。

42 「訳註」分節首言語において、つらつら文を書き重ねることをやめ、「省略 (ellipse)」を用いると通常詳細が失われ、明白でなくなるものだが、身振り言語は省略をしなへてもそもそもあまり明白ではなご。

43 [GAL 18]『人間悟性論』(3.2. §1)のなかで、人間の思考は「すべて精神において、他の人には見え、隠された形で閉じ込められている」のだから、「思考を構成する見えない観念が他の人に表明されることを可能とする(精神の)外にある感性的な記号」を考案することが必要であるとロツクは述べる。デイドロはこの一節

でさらに先を行き、言語にはもはや単純なコミュニケーションの機能だけでなく、およそ思考を構成するといえるような機能がある。

44 [DPV 31]「記号 (signes)」という語の哲学領域の用法については、『認識論』を見よ (1-24, 83f)。

45 [DPV 32]本質的な反論。実際に、取り決めの唾者たちが「諸観念に与えるのに相応しいと判断した順序」において自由であるが、彼らはしかしながら、「主語と述語がどのような関係であっても述べられないようなフレーズ」を形成してはならない。このことは、結局取り決めの唾者たちに、あらかじめ決められた文法図式を押し付けることになる。デイドロ自身、自分で作ったこのシステムの欠陥に気づいている。